

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功の



美術の時間
エッセイ
的
す
た
す
た

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その105 ユニバーサル・ミュージアムの二つの研修会

手話の研修会

この二月、徳島県立近代美術館ではユニバーサル・ミュージアムを進めていくための二つの研修会がありました。手話についての研修会とカラー・ユニバーサルデザイン研修会です。美術館だけでなく、文化の森総合公園各館から職員が集まりました。

手話研修では、最初、聴覚・ろう重複障害者生活支援センター理事長の戎浩司さんの講演があり、聴覚障がいとはどのようなものなのか、手話の歴史や手話のポイントはどこにあるのかを分かりやすくお話しいただきました。

どのようなことでも、できる人はできない人のことが分かりにくいものです。お話をうかがっていると、まさに聴覚障がい者をめぐる状況がそうなのだと思われかされました。聴覚障がいにもいろいろな種類があって、たとえば感音性難聴の方は、子音が聞き取りにくく、「あえいああん」という意味のない音が「あれいかん」と、注意されているように聞こえるそうです。子音のない音声の例を聞か

せてもらいましたが、私もまったく分かりませんでした。母音と子音の構造でいうと、「タバコ」と「タマゴ」、「クリスマス」と「土踏まず」、「うち、泊まっていきませんか」と「プチトマトいりませんか？」の区別がつかなくなります。

では、どのように意思の疎通をはかったらいいのでしょうか？ 一三〇年間に世界の聾教育で行われてきた口の動きから話を読み取る「口話法」の撤廃決議は、二〇一〇年の世界聴覚障害教育会議だったといえます。近年のことです。日本語であれば、「今夜は飲みません」「飲まない」という意味にも「飲みたくない」という誘いの意味にもなります。口話法に問題が多いのは明らかでしょう。

それに対して、手の動き一つ一つに意味がある手話は、聴覚障がい者の方々にとって分かりやすく、意思疎通の手段として欠かせない一つの言語となっていています。日本人なら、日本語に囲まれて育ちますが、同じように聴覚障がい者は手話によって会話をしますので、

言葉としてどれだけ大事なかが分かるはずですが、文字を読むとすぐ疲れるけど、手話なら長くても大丈夫、という方のお話も聞きました。それも「母語」だからなのでしょう。

徳島県立近代美術館が、手話を取り入れた展示解説や対話型鑑賞の催しをはじめ、六年前が過ぎました。次のステップとして、クレイ〈子供と伯母〉（一九三七年）など当館の代表的な作品を手話で解説するビデオがつくれぬか、いま可能性を検討しています。展示室に持ち込んだタブレットで解説を見たり、インターネットで見たりすることができれば、より多くの方に美術鑑賞を楽しんでいただくことができるかもしれません。

研修では講演後、各館の参加者が手話を体験。そして、美術館と博物館の職員が、手話ビデオなどについて徳島県聴覚障害者福祉協会理事長の平光江さんや手話通訳士の方々と交えて意見交換することができました。

カラー・ユニバーサルデザイン研修会

カラー・ユニバーサルデ

ザインの研修会も、私にとって新しい体験となりました。講師は、カラー・ユニバーサルデザインをすすめる会の方々です。

色の見え方も人によってさまざまです。弱い色弱を含め、何らかの色覚異常がある人は世界中に二億人、日本では静岡県の人口に相当する三百数十万人の人がいるといえます。そのような色弱者にも情報が伝わるような色づかいを考慮してデザインすることを、カラー・ユニバーサルデザインといえます。

研修では、色弱者の色の見え方が体験できる眼鏡（バリアントール）でいろいろなものを見ることになりました。真っ赤な文字が黒い地から浮き上がる強烈なボスターは、赤が地の色と区別がつかないほど沈んで見えます。

街のなかの男子トイレと女子トイレを色だけで区別すると、色弱者は困ってしまふことも分かりました。カラー・ユニバーサルデザインでは、形に差をつけたり、明度に差をつけたりして、色以外の情報を組み入れて識別できるようにしています。



徳島県立近代美術館外観

この研修会では、展示室で作品の色についての感じ方を交流するワークショップを行い、色弱者が参加できる鑑賞の催しのあり方も探ろうとしました。作品の色に注目してカルタの読み札をつくって当てっこしたり、色から感じることやそう感じた理由をカードに書いて披露したりしました。交流の方法としては、これまで当館でやってきたものなのですが、色の見え方が違う人に、その色の部分をどのように感じたのか知ってもらおう有効な手立てになると思いました。色の感じ方は経験にも影響されますので、交流すると相互理解につながります。

で眠る女（一九三二年）の鮮やかな赤を黒く感じる人も、ソフトで赤の部分がかると、意見を交流させるときに役立ちます。そのような機器を使うと、催しの可能性も広がっていかもれません。

少しずつ地域に根付いてきた活動

美術館でのユニバーサル・ミュージアムの催しは、誰もが遠慮なく、鑑賞を楽しめる環境をつくる試みなのだと思います。研修の折り、聴覚障がい者の方は聞こえていなくても、傷つきたくないで分かったふりをしてうなずくことがある、という話を聞きました。強い色弱者の方も、色の話題に入っていけないと、同じようなことがあるのでしょうか。そこには、コミュニケーションがとれず孤立する人の姿があります。

美術館でそのようなことがあってはならないのはいうまでもありません。当館では、これまで目の見えな人を対象とする催しも積み重ねていて、近年では、そこに参加する人が、障がい者対象とうたっていない展示解説などにも来てくれ

るようになっていきます。そのように、誰もが普通に作品鑑賞が楽しめる機会が広がるよう、来年度もいろいろな分野で工夫を重ねていきたいと思っています。

もちろんユニバーサル・ミュージアムの活動を含め、美術に親しむ活動は全国的美術館で行われています。東京など大都市での活動は全国的に知られることが多く、地方でもリニユールした美術館などが、積極的に普及活動をアピールしています。それらに比べると華やかさはないのですが、地元の人たちや関係する人たちに依拠し、地域に根付いて、こつこつと活動を積み上げてきたのが徳島県立近代美術館の活動の特徴といえるのかもしれない。

「物質的な豊かさから心の豊かさへ」といわれた当館開館の頃はもちろん、この連載がはじまった九年前と比較しても、美術館をめぐる社会的環境は大きく変化しています。展覧会予算などの大幅な減少、学校数や児童生徒数の減少。街の画商さんも徳島では少しずつ店を閉めています。美術・文化をめぐるさまざまな困

難があるなかで、知恵をしぼり、多くの人の協力を得て、地域に根付いた美術館となるよう努めてきました。その過程のいくばくかは、この連載でも記録できたのかもしれない。

あつがひのつとま

さて、この二〇一七年三月号をもって本誌「エコジャ」（徳島エコノミージャーナル）が終刊となるため、「美術を楽しむ、美術館を楽しむ」も今回が最終回になります。連載がはじまったのは二〇〇八年三月。それからまる九年間、毎月、徳島県立近代美術館の活動を報告することができました。回数は一〇五回です。当初の予定にないほど長く続けることができたのは、読者の皆様のおかげだと感謝しています。このような原稿があつても、あたたかく声をかけていただくこともあり、私にとつてコミュニケーションの楽しさが実感できる大事な場となっていました。二年前の四月には、当初の紙媒体の雑誌からインターネット版に変わりましたが、新しい読者の方に会えることもできました。

「エコジャ」での連載はこれで終わりますが、可能な別々の場で当館の展覧会や普及事業について紹介する機会ができればと考えています。まずは、長年のご愛読をお礼申しあげます。ありがとうございました。

3月の催し

■所蔵作品展徳島のコレクション 特集「作品の中の作家」

・子ども鑑賞クラブ「作家の巻」

18日「土」14時～14時45分

・テーマで知る名品「作品の中の作家」 19日「日」14時～14時45分

■「フリースペースチャレンジとくしま芸術祭 2017」

・受賞者発表会

・展示部門 11日「土」、12日「日」

9時30分～17時（12日は16時30分まで） 展示室3（2F）

・パフォーマンス部門 12日「日」

13時30分開場・14時開演（16時30分終了予定） 途中入場可 イベントホール（1F）

□季節とアートをつなぐワークショップ

20日「月・祝」10時～12時

講師：富林純子（徳島県シェアリングネイチャー協会会員）、参加対象…どなたでも、定員…20名程度、【申込方法】電話・メールにて先着順。詳しくは当館ホームページ、あるいは電話で（088-668-1088）、

締切は3月10日「金」

子どもから大人まで、また耳が聞こえにくい方や目が見えにくい方も一緒に参加し交流できる内容。